

[原著論文]

定型発達児と言語発達障害児における初語の調査

吉岡 豊¹⁾, 土佐香織²⁾

キーワード：初語，定型発達児，言語障害児，語彙発達

First Word of Typically Developing Children and Language Impaired Children

Yutaka Yoshioka¹⁾, Kaori Tosa²⁾

Abstract

This study was designed to investigate the difference in first words between typically developing children and language impaired children. Data were collected from 228 typically developing children and 21 language-impaired children. The data include questions to caretakers such as the period of the first-words production, the sound of the first-words production, the meaning of the first-words production, and the impression of the parents about their children's first-words development. The following is the result of the questionnaire: Of the typically developing children, approximately 90% produced their first words by 15 months of age. A majority of the first words consist of "ma-ma" meaning "mother" in Japanese. The second frequently uttered words are "mam-ma" meaning "food" in Japanese. The parents of typically developing children noticed when their children did not produce their first words by 17 to 18 months of age. A majority of the language impaired children did not produce their first words before 17 month years old. In some cases, the production of the first words did not occur until four years old. The content of the first words were the same in most cases for both the typically developing and the language impaired children. However, the language impaired children uttered such words as "o-wa-ri" meaning "finish" in Japanese and "go" in English. These words were not identified in the production of the typically developing children. These results suggest that the first-words production is delayed in the language impaired children, and some of the words produced by the impaired children are different from those produced by the typically developing children.

Keywords : First word, typically developing child, language impaired child, vocabulary development

1) 新潟医療福祉大学言語聴覚学科 2) 秋田赤十字病院リハビリテーション科

[連絡先]

1) 〒950-3198 新潟市北区島見町1398
新潟医療福祉大学

TEL : 025-257-4425 (直通)

E-mail : yoshioka@nuhw.ac.jp

2) 〒010-1495 秋田市上北手猿田苗代沢222-1
秋田赤十字病院

TEL : 018-829-5000 (代表)

要約

子どもが初めて発する意味ある音声表出を初語という。本研究では、定型発達児と言語発達障害児の初語について検討した。対象は定型発達児228例と言語発達障害児21例であった。対象児の保護者に初語に関するアンケートないし問診を行い、初語の時期、初語発語、初語の意味内容、初語表出時期についての感想を聴取した。主な知見は以下であった。定型発達児では約90%が15か月までに初語が表出されていた。初語には「ママ」が最も多く、その意味はお母さんであった。次に多いのは「マンマ」であり、その意味内容は食べ物であった。定型発達児の保護者にとって初語が遅いと感じ始める時期は17～18か月頃からであった。言語発達障害児の多くは、初語表出時期が17か月以降で、4歳を過ぎても初語がない例も認められた。言語発達障害児の初語の多くは定型発達児と同じであったが、「おわり」や「ゴー」といった定型発達児では認められない初語があった。以上の結果から、言語発達障害児では初語が遅れること、初語が定型発達児とは異なる可能性が示唆される。

I 目的

生物としてのヒトは生後すぐには自力でほとんど何もすることができず、主に探索反射や吸啜反射などの原始反射が認められるのみである。しかし、月数を重ねるにつれ脳が発育して原始反射への抑制が働くようになり、行動は反射から反応へと移行していく。生後8か月頃からはコミュニケーションにとって重要な共同注意が見られるようになり、生後約12か月(1歳)前後に歩き始め、初めて意味のある音声を発する。これは初語(あるいは始語)と呼ばれており、表出語彙の最初の語として位置づけられる。ほぼ生後12か月(1歳)前後には初語といわれる音声言語を発し、就学までに語彙のみならず構文(統語)能力も談話能力も獲得して、音声言語を用いて思考したり周囲の人とのコミュニケーションを行ったりするようになる。1歳前後で初語が認められることはヒトという種に普遍的な現象で、どの言語を獲得したとして変わらないと言われている。したがって、初語の遅れは言葉の遅れを発見する重要な指標となっている。

定型発達児の初語は12か月前後にみられると述べたが、初語の表出時期には性差があり、日本版デンバー式発達スクリーニング検査第1版の言語項目「ママ、パパなど意味のあることばを1語いう」では、女児の90%が14.1か月でクリアーしているのに対し、男児では14.8か月を要している¹⁾。また、小椋ら²⁾は、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙に関する標準化データから女の子の方がやや早いことを示している。また、さらに藤原ら³⁾は、1歳0か月から1歳11か月までの幼児310名(男児150名、

女児160名)を対象に、各年齢における平均表出語彙数と品詞、性差を検討した。その結果、1歳0か月では平均表出語彙数が 2.9 ± 2.4 語であり1歳前後に言葉が出始めていたが、それ以降1歳10か月では男児63.7語、女児127.6語、1歳11か月では男児61語、女児144語と男女差が広がる傾向にあり、その差は有意であったと報告している。さらに初期表出語彙の品詞についても検討し、1歳0か月～1歳6か月まではほとんどが名詞であり、1歳5か月になって初めて動詞が平均1語を越えるようになり、1歳7か月には他の品詞も増加していくことを示した。また、初期に表出される名詞は大多数の年齢範囲で「動物、人々、食物と飲物」が多く、「おもちゃ、家庭用品、場所と部屋」などのカテゴリーの語彙は増加の遅いことを明らかにしている⁴⁾。

以上のように、初語から始まる1歳代小児の表出語彙には名詞が多いことは明らかとなっており、このことから初語も名詞である可能性が高いと思われるが、実際にはどのような語が初語として現れているのであろうか。初語には構音のしやすさも初語に影響すると思われる。通常は「マンマ、ママ、パパ、ブーブー」などであることは広く知られている。我々は最初に表出される語彙、すなわち初語がいつ頃表出されるのか、またその初語はどのような語彙であるのかを検討するため定型発達児に対してアンケート調査を行った⁵⁾。今回はさらに、言語発達障害児に対して保護者に直接問診することによって初語について追加調査したのであわせて報告する。

II 対象と方法

対象はA県内にある保育園3施設に在籍する園児228名(男児112名、女児116名)の養育者を対象にアンケートを実施した。なお、発達に遅れがあると保育士が判断した幼児は分析から除外した。言語発達障害児は定期的に訓練を行ってきた21例(男16例、女5例)であった。言語発達障害児が本学言語発達支援センターを訪れた時の初診年齢は3歳0か月～10歳2か月であった。21例の内訳は広汎性発達障害(自閉症、特定不能などを含む)が10例、ダウン症が3例、レックリングハウゼン病が1例、知的発達障害が1例、不明ないし未受診が6例であった。なお、ここでいう言語発達障害児とは、田中教育研究所編の言語発達診断検査(表出語彙)あるいは絵画語い発達検査(理解語彙)を実施した結果、表出あるいは受容のどちらか一方の側面で1年以上の遅れがあった場合とした。

何をもって初語とするかについては議論の余地はあるが、今回は伊藤⁶⁾の定義にしたがった。伊藤によれば、初語とは「子から母への音声的伝達において母が意味す

る語だと受け取った音声単位」であって、音声形式が安定していること、その音声形式が母親以外の他者にも理解可能なものであること、以上の2条件も満たすものを初語とした。

アンケート内容は表1に示したとおり、初語表出時期、その音形と意味などについて質問した。また、運動発達の遅れの有無をみるために初めて歩いた時期(始歩)について聞いた。なお、アンケート調査を行う前には文書ないしは口頭で研究内容の説明を行い、その趣旨を理解し同意が得られた保護者に対してのみ初語に関するアンケートを実施した。

表1 初語に関するアンケート内容 (抜粋)

1. 性別
2. 初めて話した意味のある言葉は何か?
3. 初めて話した言葉の意味は何であったか?
4. 初めて言葉を話した時期はいつか? (月齢で、はっきりわからない場合は12~16か月と期間で回答)
5. 初めて歩いた時期はいつか (月齢で)
6. 初めて言葉が出た時期をどう感じたか (早い, 遅い, 普通)

III 結果

1. 定型発達児における初語

まず、初語が認められた時期について検討した。なお、今回は性差をみるのが目的ではないので男女をまとめて分析した。アンケートの回答には初語表出時期が12か月といった明確な時期で回答したものと12か月から14か月といったある一定の期間で回答したものがあつた。そこで一定期間で回答したものについては中間の時期を初語表出時期として分類した。すなわち、12か月から14か月の場合は中間の13か月、12か月

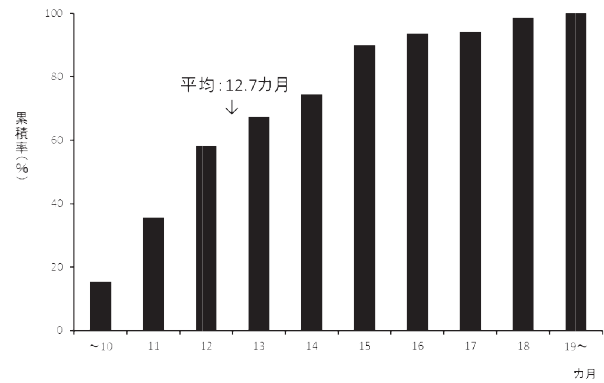


図1 定型発達児の初語表出時期の累積率

から15か月と回答した場合の中間は13.5か月なるが切り上げて14か月とした。初語表出時期が無回答であった9例を除いた219例の分布を示したのが図1である。初語表出時期の平均は12.7か月であったが、この図を見ると15か月までに大半の幼児で初語が認められ、全体の約90%で初語が認められた。なお、12か月を境に臨界比で検定を行ったところ12か月とそれ以降とでは有意な差があつた (CR=2.02, P<.05)。これに対して初語が17か月以降と遅かつた幼児も10名程度認められ、特に初語が24か月であつた幼児が2名いた。

次に初語のカテゴリーが何であつたのかをみたのが表2である。今回は意味的まとまりで分類したが、感覚的なわかりやすさも考慮してオノマトベといった言語学上の枠組みも使用した。この表から、初語の多くは家族内の人で全体の50%を占めているのがわかる。次いで多いのは食べ物であり全体の28.9%、その他にはオノマトベ、一般名詞、その他 (返事の類、様子や状態など) であつた。これらの初語がどのような音声と意味で表現をされていたのかについては表2の下段に示した。表2から、家族の場合はその半数以上が「ママ (母親)」, 食物の場合はすべてが「マンマ」という表現、オノマトベでは「ワンワン」などといった動物を表す表現であつたことがわかる。

表2 定型発達児にみられた初語の分類 (194語)

分類基準	家族	食物	オノマトベ	一般名詞	その他
語数	97	56	19	14	8
(%)	50%	28.9%	9.7%	7.2%	4.2%
最頻度語	ママ	マンマ	ワンワン	-	-
(%)	58.8%	100%	47.3%	-	-

表3 定型発達児の初語表出時期に関して遅いと判断した養育者の割合

月数	~10	11	12	13	14	15	16	17, 18	19~
%	3	5	13	9	14	9	38	58	0

次に、表3では初語の表出が遅いと感じた時期について検討した。初語の表出時期と養育者の感覚との関係について調べた理由は以下の通りである。一般的に言語に関して遅れているのではないかと判断する最初の人、医療従事者ではなく養育者である可能性が高い。この判断があって初めて専門機関を訪れるのである。そして、言語の専門家は言葉に問題があるという前提で子どもを診ることになる。とすれば、当然のことながら養育者が自分の子どもの言葉に遅れがあると認識し始める時期より早くに専門家が当該患児を診ることはない。そういった意味で養育者が子どもの言葉に気になり出す時期を調査した。その結果、初語が遅いと半数以上の養育者が感じ始める時期は17, 18か月以降であった。

2. 言語発達障害児における初語

これまで定期的に訓練を実施してきた(あるいは実施中)言語発達障害児21例に関する結果を述べる。何らかの疾患があった場合には一般的には初語に遅れが認められる傾向にあるが、これまでかかわってきた小児言語発達障害児例の初語表出時期を調べると表4のような分布になった。表4からは定型発達児を持つ養育者で初語が遅いと感じなかった17か月よりも前に初語が認められたのは3例のみであり、全体の大半は17か月以降に初語があったことがわかる。特に24か月(2歳)以降から54か月(4歳8か月)と著しく遅い時期に初語が認められた例も8例あり、不明を含め全体の85%以上で初語に遅れが認められた。なお、例数は大きく異なるが、定型発達児の初語表出時期との差を検定したところ言語発達障害児では有意に初語が遅かった($\chi^2=49.02$, $df=1$, $P<.001$)。

次に、どのような語が初語として表出されたのかを見たものが表5である。初語が何であったのかを明確に覚えていない保護者もいたので、はっきりと初語内容を同定できていたもののみを取り上げた。この表か

ら、一般に初語としてよく認められる「ママ、パパ、マンマ」やオノマトペ(ブーブー、モーモー)が認められる一方で、「おわり」といった絵で提示することが困難と思われる名詞、英語と思われる「ゴー」といった語も認められた。さらに、「雨の)のア」というワードパーシャルも初語として記載されていた。これら初語の意味カテゴリーについて分類してみると、家族内が9、オノマトペが2、英語と思われるものが1、一般名詞が2であったが、一般名詞はその1つがワードパーシャルであった。なお、「おわり」や「ゴー」が初語であった2例は広汎性発達障害との診断を受けていた。

IV 考察

初語に関する本研究の結果、定型発達児では12か月前後、遅くとも15か月までには90%近くの子どもで初語が認められることがわかった。この結果は、戸田⁷⁾、藤原⁴⁾の結果とも一致する。一方、例数が少ないものの言語発達障害児で対象児の80%以上の割合で初語の遅れを認めたが、初語表出時期に遅れを認めなかった例も見られた。以上のことから、通常、初語は12か月前後の一定期間内に認められ、それが遅れた場合は言語発達の遅れが示唆されるものと思われる。しかし、初語に遅れを認めない例も存在したことから、初語に遅れないことが言語発達に問題がないことを意味するわけではないものと思われる。

次に本研究の結果、初語で最も多いカテゴリーは家族であった。藤原⁴⁾でも初語で一番多かったのは「パパ、ママ」であり、本研究はこの結果と一致する。また、次に多いのは両者とも食べ物を示す「マンマ」であった。藤原⁴⁾の研究は厳密には初語とはいえないが、1歳0か月から1歳3か月までに表出された語彙の意味カテゴリーで多かった上位3つは「人々、動物、食物」であった。本研究で3番目に多かったオノマトペであったが、その多くが動物に関わるオノマトペであったことを考える

表4 言語発達障害児における初語の時期 (n=21)

12~15か月	18~20か月	24~54か月	不明
3	7	8	3

数字は人数、不明とはまだ初語が認められない、覚えていないを意味する

表5 言語発達障害児における初語の内容

ママ	パパ	マンマ	おわり	ブーブー	モーモー	ゴー	(雨の) ア
5	2	2	1	1	1	1	1

数字は人数、不明ないし未発話のものは除く

と、本研究の初語傾向はこれまでの研究の傾向と一致しているものと思われる。例数に大きな開きがあり、かつ言語発達障害児の例数が少ないことを考慮する必要はあるものの、全体として初語の内容に大きな違いはないのではないと思われる。また、初語として表出される音声も両唇破裂音である場合が多く、これは構音のしやすさあるいは構音獲得順序が影響しているものと思われる。

しかしその一方で、言語発達障害児の初語のなかには定型発達児では見られないものがあつた。すなわち、言語発達障害児の初語には「おわり」や「ゴー」があつた。これらの語は、戸田⁵⁾や吉岡⁷⁾の結果から定型発達児の初語としては認められていない。また、「おわり」や「ゴー」といった言葉は身近な言葉とは言い難い側面がある。すなわち、定型発達児に多く見られた「ママ、パパ、マンマ」は幼児が毎日接しているまさに身近な人物や物に対する語であるが、言語発達障害児に見られた「おわり」は通常早期には獲得されるとは考えにくい。この点について保護者に聞くと、「おわり」はテレビ番組からの音声を聞いてから使い始めたとのことであつた。このことは聴覚的に入力された音声が反響言語的に復唱され、初語として定着した可能性を示唆している。この傾向が本当に言語発達障害児の特徴といえるのかという点については、反響言語がしばしば認められる広汎性発達障害児における初語について例数をさらに増やして調査していく必要があるものと思われる。また、初語として発声された音声も「ママ」や「マンマ」が両唇音と比較的早期に獲得される構音であるのに対し、「終わり」の「り」は弾き音、「ゴー」は軟口蓋音と比較的獲得が遅い構音である⁸⁾。この点も定型発達児と言語発達障害児とは一致していない。今後は初語の音声表出とその意味について検討する必要がある。また、その初語が命名行為であつたのか、あるいは要求として表出されたのかについても興味深い検討事項と思われる。綿巻⁹⁾は一女兒の初語「マンマ」の意味分析を行い、「マンマ」が要求表出と密接に関連していることを指摘している。今後は、言語発達障害児における初語そのものが命名機能なのか要求機能なのかについて検討していくと興味深い知見が得られるものと期待される。また、質問票のような形で

はなく綿巻⁹⁾のように初語について直接的に観察する研究も重ねていく必要があると思われる。

最後に、今回の研究では言語発達障害児について、表出か受容のいずれの側の側面で1年以上の遅れがあつたものとしたが、医学的診断名は自閉症、レックリングハウゼン病、ダウン症など多岐にわたつていた。今後は一例一例を縦断的に検討して、その差異について検討する必要があると思われる。

謝辞

稿を終えるにあたりご助言を賜つた新潟大学大学院長澤正樹教授、ならびに本学言語聴覚学科長 山岸達弥教授に深謝いたします。また、資料収集にご協力をいただいた保育園の先生方と保護者の方々に厚く御礼申し上げます。

V 引用文献

- 1) 上田礼子：日本版デンバー式発達スクリーニング検査 第1版。医歯薬出版。東京。pp80, 1980.
- 2) 小椋たみ子, 綿巻 徹：日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」手引き。京都国際福祉センター。京都。pp57-60, 2004.
- 3) 藤原雅子, 今給黎禎子, 安川千代ら：1歳代の言語発達-1歳0か月から1歳11か月の表出語彙-。九州保健福祉大学研究紀要, 6:235-241, 2005.
- 4) 藤原雅子, 今給黎禎子, 安川千代ら：1歳代の表出語彙の発達-品詞による分析;名詞-。九州保健福祉大学研究紀要, 7:161-168, 2006.
- 5) 吉岡 豊, 土佐香織：初語の意味内容と表出時期について。新潟医療福祉学会誌, 12:46, 2012.
- 6) 伊藤武彦：初語の理論的規定の試み。心理科学, 8(2):13-18, 1985.
- 7) 戸田須恵子：乳児の言語獲得と発達に関する研究。北海道教育大学釧路校研究紀要, 37:101-108, 2005.
- 8) 阿部雅子：構音障害の臨床-基礎知識と実践マニュアル-。金原出版。東京。pp4, 2003.
- 9) 綿巻徹：一女兒の初語「マンマ」の意味分析。日本教育心理学会総会論文集, 28:280-281, 1986.